

映画で学ぶシリーズ4

「映画のなかの映画」

——さまざまな影響関係をさぐる

コーディネーター
青地 伯水（京都府立大学教授）



一般の方、どなたでも
受講できます。

日時

2025年12月20日、
2026年1月10日、17日、24日
の土曜日4回 各回13:20-15:50

場所

キャンパスプラザ京都
12月20日のみ第3講義室、
1月は第4講義室

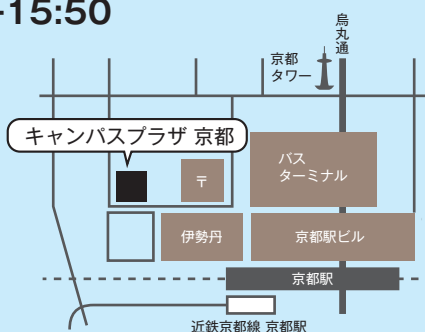
定員

55名 先着順

受講料

4000円(4回通しのみ)

※第1回目に現金をお願いします。30分前から受け付けます。早めにお越しください。
※高校生、京都府立大学生ならびに三大学共同化科目受講生は無料(要登録)



募集期間: 2025年12月16日まで(定員に達し次第締め切ります。)

申し込み方法: 右のQRコードから

または、h_aoji@kpu.ac.jp 宛に、件名を「リカレント学習講座申し込み」
として、氏名、電話番号を記載したメールをお送りください。





映画のなかの映画

——さまざまな影響関係をさぐる

「映画のなかの映画」は映画の多様な影響関係を意味するとともに、「とくに優れた映画」を探究対象にします。

● 各講座の概要 ●

2025 年
12 月 20 日(土)

燃え尽きたページ、重なり合うスクリーン ——『マイ・ブックショップ』と『華氏 451』 を結ぶ点と線

後藤篤（京都府立大学文学部准教授）



スペイン出身のイザベル・コイシェがメガホンを取った『マイ・ブックショップ』（2017）は、1950年代末の英国のとある海辺の町を舞台に、周囲の反対をよそに書店経営に乗り出す主人公の奮闘と挫折を描いた一作です。イギリス作家ベネロピ・フィッツジェラルドの原作小説を映画化するにあたり、コイシェはアメリカ作家レイ・ブラッドベリの小説にもとづくフランソワ・トリュフォー監督の『華氏 451』（1966）を強く意識したといえます。ともに「炎」を主題とする両作品の物語は、どのように重なり合っているのでしょうか。文学作品が言及される場面を手がかりに、『マイ・ブックショップ』に隠された『華氏451』へのオマージュを炙り出してみよう。

2026 年
1 月 10 日(土)

『静かなる男』から読み解く『ブルックリン』 ——アメリカにおけるアイルランド移民の郷愁

西谷茉莉子（京都府立大学文学部准教授）



ジョン・クローリー監督による映画『ブルックリン』（2015）は、アイルランドで生まれ育った主人公エイリッシュが望郷の念に揺れつつも、ブルックリンで新たな人生を歩み始める姿を描いた作品です。本講座で注目したいのは、ホームシックに陥った彼女に対して、同僚が映画『静かなる男』（1952）を話題にするシーンです。この映画の監督ジョン・フォードがアイルランド系移民二世であり、同作の主題がアイルランドへの郷愁である点をふまえると、この一見何気ない会話の場面には深い意味が込められていることがわかります。アイルランド移民にまつわる歴史や文化的背景に目を向けながら、両作品の関係性をひも解いていきます。

2026 年
1 月 17 日(土)

山中貞雄とヨーロッパ・アメリカの映画

青地伯水（京都府立大学文学部教授）



山中貞雄（1909-38）は、日中戦争従軍中28歳で戦病死しました。京都で生まれ育った山中は、マキノの映画会社を足掛かりに20代前半で映画監督となります。出征するまでにサイレントからトーキーへの移行期のなかで23本の映画を残しました。アメリカ映画『或る夜の出来事』やフランス映画『ミモザ館』などをどん欲に吸収しましたが、そのわずかな活躍期間に山中は、楽しい娯楽から陰鬱のある社会派へと作風を転換します。今回は外国映画作品と対比しながら、現存する『丹下左膳 百萬両の壺』や『人情紙風船』に様々な影響を見ていきます。

2026 年
1 月 24 日(土)

黒澤明『生きる』と世界文学 ——トルストイからカズオ・イシグロへ

山本葉波（京都文化博物館映像情報専門員）



黒澤明監督の『生きる』（1952）は、戦後の日本映画を代表する名作として、国内外で高く評価されています。近年のリメイク作品『生きる Living』（2022）は、イギリスのノーベル賞作家カズオ・イシグロの脚本で話題を呼びました。一方で、帝政ロシアの小説家・トルストイの小説がその原作だったことは、それほど知られていません。小説から映画へ、さらに映画へと解釈し直されるなかで、作品に残ったもの、あるいは残らなかったものはなんだったのでしょうか。『生きる』を例として、文学と映画、映画と映画のかかわりから「長い20世紀」をとらえ直すことが、本講義のねらいです。